

林業相談

クリつぎ木苗の幼齡期における枯損原因

問 昭和43年にクリつぎ木苗をもらいうけ50本程植栽しました。当初1, 2年は生育が良かったのですが、その後、毎年数本ずつ枯損し6年目でほとんど無くなってしまい、現在では台木から萌芽枝が伸びております。今後どのような処置をしたら良いでしょうか。(栗沢町K生)

答 これまでクリはつぎ木苗を主体に導入され、北海道の気候を無視し、本州の有名品種に依存した時代もあり、また林業的な感覚での取扱いと管理が不十分であったことが枯れてきた原因と考えられてきました。

しかし、良く管理をしているにもかかわらず、とくにつぎ木したものでは幼齡期に枯損するものが多くみられます。これは通称「ポックリ病」と呼ばれ、現在、本州のクリ栽培先進地でもその原因と防止対策の検討がすすめられています。

その原因と考えられるものの中に、つぎ木苗の生理、栄養的な面と病虫害や気象害等がありますが、とくに現在ではつぎ木の親和性の問題がとりあげられております。これは台木とつぎ穂がうまくゆ合し栄養の流通がスムーズにいつているかどうかということです。すなわち、台木の方が上部より太くなったり(台勝ち)、細くなったり(台負け)、つぎ木部分がコブ状に肥大したりしていないことです。前記のような状態では一般に正常な生育は望めず、風による折損も起こりますし、とくにコブ状肥大ではこの部分からの病虫害の侵入や寒害による被害も考えられます。兵庫県林試の中原氏はこの問題について台木系統別にみたつぎ木不親和症状樹の出現数を調査し、35品種のうち不親和症状がみられないのは5品種のみで、他品種では多少なりとも不親和症状が現れていることを報告しております。

このように、つぎ穂の品種と台木系統の組合せは重要な問題であるにもかかわらず、まだ試行錯誤の域を脱しておりません。当场でも昭和38年に中国グリ実生苗45本と日本グリつぎ木苗106本を植栽しましたが、昭和49年現在で実生苗の生存率は90%に対し、つぎ木苗では41%以下であり残存しているものも毎年数本は枯死しております。この原因の一つとして、前記のように本道のような寒冷地では、不親和性と同時につぎ木部の微細な傷からも、胴枯菌の侵入が考えられます。

そこで、実生苗を使用することも一策であると思います。道内ではクリ栽培の先進地のような有名品種は少ないが実生でも優良個体からとった種子であれば、今までの観察結果から、親より極端に劣るものはほとんどないとみてさしつかえないでしょう。もちろん実生の欠点はありますが、種子を地元からとればその地域の環境にあった、順応性の高い苗木が期待できます。

“もも、くり三年”といいますが、本道では結実までに5年位はかかります。その段階で期待に反する堅果であれば、優良種を高つぎしても遅くはないと思います。高つぎも同じつぎ木であり、この解決策ではないと思われるかもしれませんが、各地の高つぎ更新をしたクリ園を

みても、また当场で行った試験結果からみても低つぎを行ったものより、ゆ合がスムーズにゆき成功率も高いことが観察されております。

これらのことから、現在萌芽しているものは一番勢いの良いものを1本残し、高つぎ用台木を養成するか、また樹勢の弱いものは掘りとりてしまい実生苗を植栽された方が早道だと思います。

(樹芸樹木科 開本孝昭)